

小別沢新聞

7月

2022年(令和4年)

第12号

発行：札幌市農政課
(TEL 211-2406)
編集：株式会社ダズリング
(TEL 615-7000)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政課までご連絡ください。

小別茶話会の報告

第6回 2022年2月21日開催

報告が大変遅れてしまいましたが、今年の2月21日に通算6回目となる小別茶話会が小別沢会館で行われましたので、その内容をお伝えします。

今回の参加者は5名(町内会員(特別会員含む)3名、その他2名)でした。

《冬山ウォーク》

2月15・16日に、NPO あおいとりの主催で開催された冬山ウォークについて、講師の outwoods 代表・足立成亮さんより当日の様子を伝えていただきました。(詳しくは2面をご覧ください) 今後、こうした説明会に限らず、地域の方々とたくさんコミュニケーションをとっていききたいとのことでしたので、足立さんを見か

けたら、気軽に声をかけてみてはいかがでしょう。きっと私たちの知らない森や木に関する楽しい話が聞けると思っています。

《小別沢の課題と将来像》

参加者の永田さん及び木野さんと足立さんから、地域側としても里山事業の目的を分か

りやすく伝えていく必要があると感じ、一つのツールとして作成したという「小別沢未来妄想図」が提示

されました。彼らが仲間と考え、作った「小別沢でこんなことをしてみたい」という想像図

で、農地や森林の活用、人と人との

つながりを生む

様々なアイデアが散りばめられていました。まさに小別沢の未来に向けて、夢や期待が膨らんでいくような内容です。永田さん達は、「今後、この図を实情に合わせて修正しながら様々な企画を進めていきたい」とのことです。これまでも課題として挙げられていた、地域内外を結ぶ中間支援組織とな

るように活動されていくことが期待されます。

《その他》

現在中心となつていいる世代だけでなく、子供や孫といった次の若い世代を巻き込んで一緒に考えていくにはどうしたらよいかなど、情報発信の重要性について話し合われました。小別沢新聞の配布先を広げていくほか、ホームページの開設などのアイデアが出されたり、「何かやっている」ということをリアルタイムで伝え続け、関心をもつてもらえることが大事だということも共有されました。

また、地域内で連携する新たな取り組みの提案もありました。農・林・食・学など、小別沢エリアを会場として、地域内資源に着目・活用した協働イベントを開催することで、みんなが主役になれるのではないかと、というアイデアです。展示にかかる費用負担やアクセスの問題など課題はあるものの、そういったことができたら面白いね、という賛成意見が出ました。



地域の取り組みを応援します！

2022年度、札幌市農政課からの委託をうけて、小別茶話会の企画・運営と小別沢新聞の発行に関するお手伝いをさせていただくことになった株式会社ダズリングと申します。今後、小別茶話会や新聞の取材などでお目にかかる機会があると思いますが、皆さんと一緒に小別沢の魅力を発掘・発信できたらと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします！

第7回 小別茶話会 開催のお知らせ

日時：7月12日(火) 16:00~17:30
場所：小別沢会館(札幌市西区小別沢49)
内容：小別沢の課題と将来像他

※町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に左記担当者までご連絡下さい。
※新型コロナウイルス感染状況によって中止となる場合があります。その際は改めてご連絡致します。

札幌市農政課農政課 内野・石室
011-211-2406

森林整備に向けて 冬山ウォーク

主催 NPOあおいとり

2月15・16日、小別沢の森林整備を担う

outwoods 代表の足立成亮さんらを講師に迎え、「小別沢冬山ウォーク」木こりと一緒に冬の里山を学ぼう」が開催されました。目的は、2022年度からスタートする対象山林での森林整備について、「知りたい・関わりたい」と言ってくくださる人達や、主催者側が「手伝ってほしい」と思っている人達と、森の様子やこれ



からの調査、実際の作業の流れを共有するためでした。2日間とも、町内会員のほか、地域外に住む学生や山を歩くのが好きな人、何らかの形で自然と関わりたいという人など、総勢約20名が参加しました。

1日目はやぎやに集まり、小別沢の山について図面から見ること、里山概念や都市型・環境保全型小規模林業について情報を共有したほか、対象山林一円を撮影したドローン映像(撮影・谷口さん)を鑑賞しました。参加者の中には林業や小

別沢の知識が無い方も多く、講師にたくさん質問が寄せられたほか、主催者側が知らない地域の情報や意見・要望なども伝えられ、参加者と主催者の両方にとって勉強になる貴重な機会でした。

2日目は、スノーシューやスキーをはいて、森林整備の予定範囲を歩き、山の全体像を把握しつつ、講師から木の種類や森の状況、それに対する森林整備の考え方、予定している作業内容などについて説明がありました。「笹は森のかさぶた、ツルは森のアトビー」という足立さんの考えに、参加者が皆うなづき、どうしたら森を元気にできるか、を考えました。当日は天気に恵まれたこともあり、奥三角山山頂まで全員が登りきることができ、帰りにはスキーや尻滑りで雪遊びも楽しめました。夏場と違い、虫がいなくて汗もかかず、思ったより疲れないという感想も聞かれ、今回参加されなかった方も、次回、参加してみたいかがでしょうか。

森の説明会

主催 outwoods

3月22日、outwoods 代表の足立さんの主催で、

2022年度の森林整備に向けた現地調査の結果報告と作業予定案についての現地説明会が行われました。森林の側で生活・仕事をしている方々を対象に、事業への感想や意見を聞きながら、既存の生活や仕事にストレスのかからない「里山の関係」を模索することが目的でした。実際の森の施業の規模感や、それぞれの生活・仕事の領域との距離感を理解できるように、スノーシューやスキーをは



いて、森につける林業のための道である「森林作業道」の予定線上を歩きまわした。登山者や侵入者とのコミュニケーション、生活・農作物被害への対策のほか、森林・林業、里山アクティビティ、動物や周辺環境との共存について考え方が共有されました。参加者からは「作物が荒らされたり、車を駐車されるのが心配」などの意見が出たほか、木材利用の新たなアイデアも共有できました。

2022年度も、足立さん達による森林の見学会や勉強会などが行われる予定です。この新聞でも、継続して取り上げ、お伝えしていきます。



小別沢のあのヒト このヒト

高柳 由香里さん

——生い立ちを教えてください
生まれも育ちも小別沢。若い頃は街の方に2、3年住んでいたけれど、出産を機に実家に戻って畑仕事を手伝うことになり

ました。農業は嫌いではないし、家族やご近所さんに子どもの面倒を見てもらえて、しかも環境もいいで子育てには良い場所です。
——高柳さんご自身の幼少期は？
私自身はピーマンの畝の除草など農業の手伝いもしていましたが、母が農作業にかかりきりだったので、家事全般を祖母とこなしていました。弟と妹は遊びに出ちゃって、私ばかりで働いて割に合わないなってこと
も(笑)
——今はどのような作物を栽培していますか
家族と小松菜をメインに栽培して市場や学校給食に出しています。他にピーマンやししとうなどを育てて市場や

スーパー、直売所(漆崎農園野菜直売所)に出しています。小松菜は夏の間は4、5回収穫するので、最盛期は朝早くからの作業です。
——森の整備が始まりますが
興味があるので、この前の座学会(冬山ウォーク)に参加しました。うちが森から離れていることもあって、色んな人が集まって来るんだ、面白そう!と傍から見ている感じです。
——小別茶話会がきっかけで始められたことがありますが
きのこを育ててみたいと茶話会で話したことをきっかけに、その時来ていた方がほだ木だけじゃなくて、きのこの種菌まで提供してくれました。きのこはとりあえず2年はかかるそうなので、うまくいったら直売所で売ってもいいかなと。
——きのこ栽培で農業と林業の繋がりができましたね
農業と林業はそれぞれ独立しているから連携して

何か、ということとはなかなか難しいのかなと思います。繋がりの有無に関わらず、新しい人が入って何か面白いことが始まったらいと思います。
——最後に、小別沢が将来どのようになっていて欲しいですか？
最近はこの辺りにも熊が出たり、鹿にマルチを破られたりしているので、森林整備でそういった被害が抑えられたら安心ですね。小別沢トンネルできて街までのアクセスが良くなり、車の通行量が随分増えたけど、車通りが少ない早朝はとでも静かで空気がきれいいやつぱり小別沢っていいなと思う。この環境がこれからも守られてほしいです。面白いことが起きてほしいと思いつつ、適度に暮らしたいところは変わらないうえにほしいです。



4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

里山事業のスケジュール

小別沢新聞	第12号 (2022)	第13号	第14号	第15号	第16号
小別茶話会	第7回 7月12日 火	第8回	第9回	第10回	
森林整備 森林経営管理法	森林作業道 づくり				

小別沢新聞

9月

2022年(令和4年)

第13号

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：株式会社ダズリング
(TEL 615-7000)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

小別茶話会の報告

第7回 2022年7月12日開催

7月12日に通算7回目の小別茶話会が小別沢会館で行われました。今回の参加者は6名(町内会員(特別会員含む)5名、その他1名)でした。



《これまでの振り返り》
初めに、「里山活性化推進事業」の概要と「森林整備」についておさらいし、進捗状況や今後のスケジュール等を共有しました。市からは、「今後、行っていく事業の方向性や取組のキーワードをまとめた資料を1枚作りたい」との話がありました。

続いて、これまでの小別茶話会を振り返り、「小別沢を他地域にPRはしたいが、たくさん観光客を呼

び込むのではなく、キャッチしてほしい人に訪れてもらいたい」「次世代を巻き込んで何か取組めないか」といった要望や、「炭焼きイベントや市民参加型の薪作りの場を作れないか」など出された意見を共有しました。

《意見交換》

意見交換では、札幌市円山動物園との協働について「小別沢で出た枝葉をゾウの餌として園に提供し、園からはゾウの糞から作った堆肥を提供してもらい、野菜作りに活かしていく。動物園の中でもその野菜を販売するのも良いかも」「ゾウが食べ残した木材で炭を作れないか」等の意見や、「割箸を持ち寄って炭焼きしながらバーベキューを楽しんだら」「新月伐採(※1)を実施して子ども達に見せたり、そのストーリーを絵本にしては」など、

自然との共生や、他ではできない小別沢ならではの付加価値の向上を意識した意見とともに、「中間支援組織(※2)は一つじゃなくても良い」「市も農政だけでなく色々な部局と連携していく」といった、取組み方に関わる意見も出されました。

また、市から、地域の取組を支援していく制度の創設を検討していることについて話があったほか、中間支援組織を対象に補助を行う「札幌市文化芸術創造活動支援事業」の仕組みが里山事業にとっても参考になること等について意見が交わされました。その他の意見は別紙「第7回小別茶話会における主な話題」をご覧ください。

※1 樹木の中に栄養水が少なくと言われる冬の新月の日に伐採すること。これにより、耐久性が高い良質な木材となるとされている(諸説あり)。
※2 行政と地域の間立つて様々な活動を支援する組織。

9月20日(火) 同日に開催します

14:30
~15:30

森づくりの説明会

場 所： 森林整備実施箇所

主 催： outwoods

協 力： (株)やまのかいしゃ、札幌市農政部

申 込： 090-3893-3115 (野中)

minori.nonaka.meru0501@gmail.com

*参加を希望される方はお問合せください*集合場所未定(参加決定後、連絡)

16:00
~17:30

第8回小別茶話会

場 所： 小別沢会館(札幌市西区小別沢49)

内 容： 取組の体制づくり

*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に下記担当者までご連絡ください。

*新型コロナウイルス感染状況によって中止となる場合があります。その際は改めてご連絡致します。

☎211-2406(札幌市農政部農政課 内野・石堂)

森林整備が 始まりました

《森林作業道づくり》

足立成亮さん

(outwoods) による環境保全型林業が始まり、7月中旬から8月上旬にかけて森林作業道がつくられました。森林作業道は来年度から始まる間伐作業の時に使う道で、ここを通って重機が移動したり木材が搬出されることになりません。道幅は小型トラックが通れる程度で、木の間を縫って蛇行していることが大きな特徴です。これはなるべく森にダメージを与えず、また、景観が変わらないよう、



伐る木を最小限に抑えているためです。また、伐った木の切り株は、法肩に積んで土留めとして活用するなど、基本的に現場にある自然物だけで道がつくられているので、森に溶け込むような心地よい景色が印象的です。今年はまだ木材がほとんど出てきませんが、「薪」や「ゾウの餌」(詳細は後述)など、小別沢産の木が販売・活用され、地域の新たな魅力になっていくことが期待されます。

9月20日には森づくりの説明会も開催されますので、興味がある方はぜひご参加ください(申込方法などの詳細は1面を参照)。

※関係者以外の車両侵入を防止するため、森林作業道の入口には札幌市でゲートを設置しました。

《森とどうぶつえん》

7月23日、森林整備の一環でNPOあおいとりの札幌市円山動物園の共同開催により、「森とどうぶつえん」というイベントが行われました。親子連れなど12組が参加の元、小別沢の森や畑、円山動物園をフィールドとして「小さな循環」を学び、体験しました。

午前中はみんなで小別沢の森に入り、間伐作業を体験。木こりの足立成亮さん(ninowoods)から環境に優しい森づくりの話聞いた後、ゾウの餌となる枝葉を集めました。子ども達の顔は真剣そのもので、2台あったトラックがあつという間に一杯になりました。

午後は円山動物園に移動し、採ってきた枝葉を子ども達がゾウ舎に設置しました。森のようになつた空間にゾウが登場すると、子ども達からは歓声



が！鼻を使って枝葉を器用に食べる様子に、大人も子どもも思わず夢中。飼育員さんから、ここにいるアジアゾウ達が、元々はミャンマーの森の中で生活し、枝葉を食べていたこと等が紹介されました。街では入手しづらい新鮮な枝葉をゾウに届けることがとても大切だと分かり、ちよつと誇らしげな子ども達でした。

その後、園内にあるゾウの糞の堆肥化施設を見学しました。高温で発酵処理され、匂いが気にならなくなった糞(堆肥)にみんな興味津々。堆肥をトラックに乗せ、小別

沢の畑に持ち帰ったところで、NPOあおいとりの永田さんから畑と堆肥の関係についてお話を聞きました。廃棄されてしまうことが多い糞も、堆肥にして畑の土に混ぜれば美味しい野菜を作ることができる大切な資源だと聞き、私達の生活が円山動物園や森とつながった瞬間でした。

森(里山)と円山動物園(街)のつながりや、資源の循環を親子で学べる盛りだくさんのプログラムでしたが、子ども達が最後まで元気いっぱいに参加している様子が印象的でした。



(写真左から) 藤田進さん、首藤康子さん、佐々木信さん



小別沢のあのヒト

(株)庭
藤田進さん
佐々木信さん

——小別沢で農業を始め
たきっかけは？

【佐】本業は3KGという会社でグラフィックデザイナーの仕事をしているのですが、都会生活がちよつと違うなと思っていた時、アジアを訪れて惹かれる

ものがありました。庭には鶏がいて、街にはスターバックスコーヒーがあつて…。そんな時、藤田君やNPOあおいとりの永田さんが近くにいて、小別沢という環境に気がついて、ここなら同じような生活ができるかもと思いました。藤田君とは別の会社ですが、一緒に仕事をすることも多かつたので、共同の会社として(株)庭を設立し、農地を借りることにしました。

【藤】私も本業

は別で、札幌第一こどものとも社という、絵本やおもちゃを販売する会社を経営しています。大学で国際開発を学びましたが、開発する側、開発される側、上下関係が生じる現状のやり方に疑問を感じ、日本で小さくても良いから自立的に発展していく方法を取り入れたく、関東の農場

で有機栽培や畜産といった自給的な生活を経験しました。ライフステージの変化で札幌に戻ることになりましたが、その時の暮らしが抜けきらず、ずっと小別沢付近で畑を耕していました。今は手に余るほど広い規模ですね…。

——本業と農業との兼ね合いは？

【佐】昨年、拠点が2箇所に分かれていると本業と農業との両立が難しかったので、納屋を整理してデザインの仕事もできるようにし、今年是小別沢にすることが多いです。小まめに来て、少しずつその日できる農作業をしている、という感じです。街のオフィスよりもここは気持ちに余裕が出るので、デザインのアイデアが出やすいメリットも感じています。

【藤】いつも作業が追いついていませんが、タイミングを見極めて朝一や土日などに一気に取り掛かるようにしています。

——今、栽培している作物は？

【藤】全体の半分ほどの面積で小麦とライ麦を育てているほか、玉ねぎ、じゃがいも、大豆などを作っています。

——今後の農地としての目標は？

【藤】土地に合ったものを無理せず作れるといいなあと、色々と実験的に栽培しています。育つはずなのに育ちにくいものと、よく育つものつてありますよね。

——最後に、小別沢が将来どのようなようになって欲しいですか？

【佐】都会の中のポツンと田舎、が保たれたら良いと思います。ここ以外にも、都会と郊外の生活を両立できる場所が身近にもっと増えたら良いですね。

【藤】大きく変化していく、というよりも、今のそれぞれの活動状況が見えて、面白い地域だともっとよくなるようにないと良い気がします。地域全体で取り組んで行くことと、個々で取り組んでいくことが少しずつ重なっていくと楽しそうです。

4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

小別沢新聞

第12号

第13号
(この号)

第14号

第15号

第16号

小別茶話会

第7回
7月12日(火)

第8回
9月20日(火)

第9回

第10回

森林整備
森林経営管理法

森林作業道
づくり

里山事業の
スケジュール

小別沢新聞

11月
2022年(令和4年)

第14号

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：株式会社ダズリング
(TEL 615-7000)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

小別茶話会の報告

第8回 2022年9月20日開催

台風が過ぎた9月20日(火)、地域へ向けた「森づくりの説明会」(2面参照)の後、引き続き16時から小別沢会館にて行われました。参加者

は8名(町内会員(特別会員含む)6名、その他2名)でした。

最初に、令和4年度に市が取りまとめる「事業モデル」

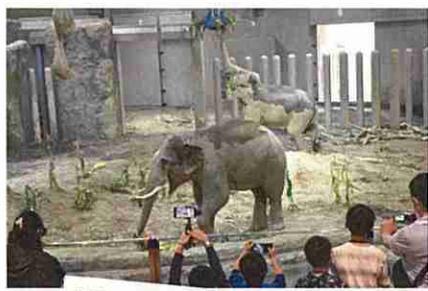


の概要や、これまでの茶話会でも話されてきた「中間支援組織」が中心となって地域の取組を進めていく体制について説明があり、他都市の事例等が紹介されました。

また、今回は、南区北ノ沢で活動するNPO法人さっぽろ農学校倶楽部の本間さんが、地域や

学校、市役所など様々な組織と連携して行っている食育などの取組について紹介してくださいました。

農学校倶楽部では、会の結成から17年目を迎え、会員の高齢化などから組織の考え方や取組を変えたこと、子ども食堂への野菜の提供だけでなく、市立大学や保健所と連携しておいしいレシピを考案していること、小別沢と同じく、円山動物園でゾウの餌となるトウキビの茎やカボチャと、



今年から NPO法人さっぽろ農学校倶楽部の圃場では、円山動物園の「ゾウふん堆肥」を活用。そのお礼にプレゼントしたトウキビの茎とカボチャを食べる様子を家族とともに見学した

写真：NPO法人さっぽろ農学校倶楽部提供

ゾウふん堆肥を交換し、畑に循環させる取り組みを始めたことなど、身近な地域でのお話しを聞くことができました。

気を付けていることは、「お金を使わないで、手間も増やさないで人を集めること」だそうです。自分たちのできる範囲で、無理なく活動するという考え方がシンプルでわかりやすく、とても素敵でした。

参加者から、森の枝葉とカボチャと一緒にゾウにあげてみてはどうか、という提案もあり、今後の活動の広がり期待です。

最後に市からは、「自然と人の話し合いから、「自然と人の共生」「景観保全」「街と里

山のつながり」をキーワードとした、

・農林業の振興

・地域コミュニティの醸成

・子どもの自然体験・学習

に関連する取組が重要と考えられること、こうした取組を支援する新たな補助制度の創設を目指していることについて説明がありました。

次回の小別茶話会では、事業モデル(素案)や今後の取組などについての話し合いを予定しています。地域の方のご参加をお待ちしております。

第9回小別茶話会

日時：11月15日(火) 16:00~17:30

場所：小別沢会館(札幌市西区小別沢49)

*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に下記担当者までご連絡ください。

☎211-2406(札幌市農政部農政課 内野・石堂)



9月20日小別茶話会同日、outwoodsの足立成亮さんによる森づくりの説明会が行われ、地域内外から8名の方が参加しました。
8月にできたばかりの森林



道は人工の空間のため、草が生えにくいよう、心土(無機質土)を使用するなどの工夫が凝らされている

今年度は約700mの作業道ができました

作業道をゆつくり歩きながら、伐る木の選び方、生えている草木の説明、来年の道づくりや間伐の計画の説明等がありました。
森林作業道は、雨水の流出を分散させる「水」、訪れる人が楽しくなるような「景観」、直線が長いほど事故が起こりやすいため「安全性」の3つを意識し、カーブと傾斜をゆるやかにつけながらつくっていくそうです。道をつくるためには、捨てない、足さない、そこにあるものを全部使って道をつくるという、環境に配慮した考え方の説明もありました。

また、間伐では、なるべく大きな木を残して、その周りの傾いた木や弱っている木を伐って薪などに活用するそうです。森のレイヤー(階層)を立体的につくることを意識し、細かく状況を見て、どの木を残すか選ぶ、選木のセンスが問われるそうです。
また、枝葉や下草を材料として化粧品を作るといった新たな業種との関わりによって、森の資源の活用が広がるなどの興味深いお話に、参加者は楽しみながら質問していました。
森づくりは始まったばかりです。ご興味のある方はぜひ、次回の説明会にお越しください。



木こり体験の様子

10月22日に、NPOあおいとの主催で、「さとやま体験会&マルシェ」が開催されました。秋の小別沢を巡ろうというテーマのもと、小別沢の森や木、農作物にふれる3つの体験会のほか、地域の直売所などをめぐるイベントです。当日は天候にも恵まれ、たくさんの方が訪れていました。
「木こりと体験、ヤマのこと」では、木こりの足立さんが講師となり、今年できた森林作業道を歩きながら、森づくりの話や奥三角山への登山、薪割り体験、コースター作りなどが行わ

さとやま体験会 & マルシェ



マグネット制作の様子

れ、30名以上の参加がありました。

「森の樹マグネット制作」では、木工作家の清水さんが講師となり、小別沢に生えていた10種類の木の違いを楽しむマグネット制作が行われ、のべ50件近い参加があるなど、最後まで人が途切れませんでした。

『みそこちゃん』の著者で絵本作家のかとうまふみさんによる「味噌づくり体験」では、小別沢産の大豆を薪ストーブで茹でて臼と杵や、手でつぶすなど、昔ながらの味噌づくりが行われました。

普段はなかなかできない体験の数々に大人も子供も真剣になって楽しんでいて、今までは少し違った里山の風景や魅力が小別沢に生まれた一日でした。

小別沢の あのヒト このヒト

(株)やまのかいしゃ
のみなさん

株式会社やまのかいしゃに
ついて教えてください
野中…代表の永田さんを中心
に、木野さん、足立さん、野
中の4人で、令和4年3月に設



左から木野さん、永田さん、足立さん、野中さん

立した会社です。

—やまのかいしゃを作ったきっかけは何ですか？

永田…これまで、私が代表を務めるNPOあおいとりで今の里山事業のような活動をしてきましたが、関わるメンバーや求められる役割が変わってきたので、今の状況に合わせて新しく仕切り直そうという事で立ち上げました。

—どのような事業や活動を行うのでしょうか？

木野…先に事業があつて会社を作ったわけではないので、今はまだ、明確に決まっているとはありません。これから、小別沢の地域課題の解決も含めて考えていければと思っています。農業や林業をすることもありますけど、小別沢の魅力が発信できるように、中間支援組織として地域づくりに関わっていきたいです。

永田…以前に小別茶話会でお披露目した小別沢妄想マップを実現することが、やまのかいしゃのひとつの目標と言えると思います。

—「中間支援組織」は、あまり聞きなれない言葉だと思えます。どのような地域づくりを考えているか、もう少し詳しく教えてください。

木野…居住者を増やしていくというよりも、関係人口を増やしたいと考えています。週末に来てくれる人、休暇や余暇を過ごす人、趣味を楽しむために来てくれる人、みたいな年に10日ぐらい訪れる人が100人、200人と増えたら面白いですね。

二世代目、三世代目の人たちが故郷として受け止められる場所だつてことを内部の人たちだけではなく、外部の人たち

ちにも関心を持ってもらえるように発信していきたいですね。

足立…文化・芸術分野に強いメンバーがいるので、そういう方面で多様なコミュニティを育てたら良いですね。特に重要だと思ふのは福祉や教育分野との連携です。施設を建てるとかではなく、福祉施設の一部の機能を小別沢にインストールするようなイメージです。

—活動のフィールドとして小別沢を選んだ理由は？

永田…小別沢は農地が狭くて傾斜が多くて、大規模な農業をやる人には向かないけど、だからこそできる半農半Xのような形に可能性を感じています。

足立…みなさん言っていますけど、都市部からのアクセスが良いことが大きな魅力ですね。

—最後に、小別沢が将来どのようなようになって欲しいと思えますか？

木野…多様なひとたちが集まることで、生き活きとした様々なコミュニティグループが生まれ、それによってまた新しい取組が自然発生的に生まれる。そうやって小別沢が活性していけば、他の里山地域にも良い影響を波及していけるんじゃないでしょうか。

4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

里山事業の
スケジュール

小別沢新聞

第12号

第13号

第14号
(この号)

第15号

第16号

小別茶話会

第7回

7月12日(火)

第8回

9月20日(火)

第9回

11月15日(火)

第10回

森林整備
森林経営管理法

森林作業道
づくり

森づくりの
説明会

小別沢新聞

1月

2023年(令和5年)

第15号

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：株式会社ダズリング
(TEL 615-7000)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

小別茶話会の報告

第9回 2022年11月15日開催

今年度3回目となる小別茶話会が11月15日(火)午後4時から始まり、参加者は6名(町内会員(特別会員含む)5名、地域外1名)でした。10月22日(土)にNPOあおいとりの主催により行われた「さとやま体験会&マルシェ」を振り返り、今後の取組にどう活かしていくかなどについて意見が交わされるとともに、市からは、来年度の予定について説明がありました。

【さとやま体験会&マルシェの振り返り】



小別沢新聞第14号でお伝えしたとおり、さとやま体験会&マルシェには予想を超える人が訪れ、たくさんの方が駐車場に車を止め、歩いて小別沢を巡りました。はじめて小別沢を訪れたという方もいて、小別沢の魅力を発信する良い試みとなったようです。

反省点としては、開催時期が予定より遅くなり、直売所で販売するものが少ない時期になってしまったことが挙げられました。味噌をつくるだけでなく、材料となる大豆を植えるところから体験したり、つくった後に前年度に仕込んだ味噌の試食をしたりするのはどうかかなど、より良いイベントに成長させるための意見も出しました。

また、一度に大きなイベントを開催するのではなく、小さなイベントを継続的に開催し、一つの取組に偏らず、地域にある個々の良い取組を複合的に里山全体に拡げていき、その役割を中間支援団体が担っていく取組方についてもイメージが共有されました。

令和4年3月にも開催されたこのマルシェイベントですが、今年度までは補助金により運営費を捻出していました。来年度以降も実施するためには収益性も視野に入れながらの運営になることから、より多くの人に参画してもらえらる構想が必要になります。課題こそ多く残りますが、今後はより地域の方々との深い連携や、様々な活動を多角的に行っていくチャレンジな姿勢が重要になってくると感じました。まずは色々取り組んでみる・うまくいった事例の真似をしたり拡げてみる・それらを継続して実施する(繰り返す)ということが重要なのではないのでしょうか。

谷口町内会長からは、町内会としてサポートできることもあるかもしれないので、必要なことがあれば気軽に相談して欲しい、という話もあり、地域との連携強化が期待されます。

小別沢には、畑のプロ・木工のプロ・林業のプロなど、その道の先生がたくさんいます。地区全体を大きな学校と捉えるときともに、福祉との関わりを持つことができたらという未来像も語られました。

【市から】
里山事業についてまとめたリーフレットの案が紹介されました(別紙参照)。小別沢で進めている取組のPRになるよう、年度末を目標にみなさんの意見を聞きながら作成を進めるそうです。

今後の予定については、市が行ってきた小別茶話会と小別沢新聞を次回で終了し、

第10回小別茶話会 最終回
日時：令和5年1月17日(火) 16:00~17:30
場所：小別沢会館(札幌市西区小別沢49)
*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に下記担当者までご連絡ください。
☎211-2406(札幌市農政部農政課 内野・石堂)

和5年度からは、地域(市民)が主体となった取組を市が支援する体制へ移行していくこととす。また、地域の取組を支援する補助制度を開始するとともに、森林整備等を継続することとす。詳細については別紙をご覧ください。

※リーフレットイメージ



さとやま農園 『小麦物語』

(株)やまのかいしゃ



収穫前の小麦

最近、小別沢で小麦畑を目にしたことはありませんか？今回は、小別沢で(株)やまのかいしゃが取り組んでいるさとやま農園の「小麦」について、代表の永田さんにお話をうかがいました。

小別沢では、過去に馬用の

えん麦が作られたこともありましたが、小麦が作付けされるのは初めてのこと。なんで小麦？ちゃんと育つの？収穫した後はどうするの？など、地域の方にとっては気になる存在ではないでしょうか。

まずは、小麦を栽培する理由を聞きました。小麦は野菜よりも少ない労力で栽培(粗放管理)することができ、作業スケジュールを組みやすく、経験がなくてもある程度の収穫が見込める作物だそうです。さとやま農園に関わるほとんどのメンバーは都市住民で、取組の柱となる作物は、こうしたものが現実的なのだそうです。里山といえれば田んぼ(お米)がつきものですが、小別沢には田んぼがないため、代わりの主食として穀類があると、農的な暮らしにつながるのではとの想いもあるそうです。

令和2年に初めて春播きのライ麦に挑戦。令和3年には面積を増やして春播きの「春よ恋」や秋播きの「きたほなみ」を作付け。令和4年には秋播きの「ゆめちから」を作



さとやま農園メンバーによる製粉

付けするなど、試行錯誤を続けています。

コンバインで収穫した後は、ビニールハウスの中で乾燥させ、保管します。その後、必要量をその都度小型の機械で製粉(右写真)して、みんながよく知る小麦粉になります。畑作業に参加した人と分け合い、余った分はレストランや製菓店へ卸したり、マルシェなどで販売(左下写真)しているそうです。

今年(令和5年)は4反で600〜700kgの収穫があったようですが、小麦粉だけでなく、パンなどに加工して販売することも検

討しているそうです。

小麦からは、ほぼ同じ重さのパンが焼けるそうで、例えば、1kgのパンを1500円で販売する場合、年間1tの小麦から1tのパンが焼け、約150万円の売上になります。これは、1週間に1kgのパンを20個焼けばよい計算になり、大きな負担とならずに家計の足しにすることができま

す。やまのかいしゃが考えるのは、プロの農業ではなく、プロとアマの中間的な存在で、技術力や収益、かける時間も半分程度のセミプロ的な兼業農家。小別沢は地理的に



マルシェで小麦を販売

も田舎とまちの中間にあり、なんでも中間の農的な暮らしをする「中間農家」が、プロの農家ができないことを埋め(補い)、街の人との関係を深めながら地域を活性化していく…そんなビジョンを叶えるために、小麦栽培に可能性を感じているそうです。

令和4年7月には、円山動物園とのつながりで、小別沢の森の枝葉をゾウの餌として動物園に届け、ゾウの糞からできた堆肥を畑に戻す試みも始まりました。

将来的には、小別沢の小麦でこねたパンを小別沢の新で焼いたり、小麦の製粉時に出るふすまを餌にして牛や羊からチーズをつくり、牛などの糞を畑に戻すなど、夢が広がります。

グローバル社会になり、資源の流れが見えづらくなっているこの時代、身近なところで資源の循環を感じることができるといえるのは、とても貴重で大切なことなのかもしれません。

小麦が秘める可能性をうかがい、令和5年の収穫がいまから楽しみになってきました。

小別沢の あのヒト このヒト

清水 郁太郎さん

※新型コロナウイルス蔓延の状況を鑑みて、今回はインタビュー形式ではなくコラム形式で掲載します。

「小別沢暮らしと創作」

三十数年前に小別沢に越してきました。札幌の街中で木工を始めて5年ほど経ち、森の中の手作りの生活にあらがれていた僕が、古い民家とその周りの敷地を借りることができたのは本当に幸運でした。屋根や下水などを自分で修理しながら暮らし始めました。

※現在は所有

春には山菜採りと小さな畑作り。夏には枯れた木を集めて薪を作り、秋には木の実の収穫を楽しみます。最初の頃は、特に古い家ゆえの冬の寒さがこたえましたが、子ども達やその友達を集めてのそり滑りには最高の場所でした。家の改修は進みましたが、あ

です。

森の中に住んでいると、動物との関わりも広く深いものになります。鳥は、姿をよく見るシジュウカラの仲間やキツツキの仲間のほか、たくさんの声が聴こえ、名前を調べていくと五十種類近くになります。一度玄関の屋根の下にオオルリが巣を作り子育てをした時は、わが家にも青い鳥が来たと感じたものです。



玄関前にオオルリが営巣

家の修復がまだ進んでいない頃はリスが屋根裏に入って巣を作ったこともあり。屋根の上を行き来するバタンバタンという音で毎朝目を覚ました。ヘビの姿を時々目にしてハッとしますが、ネズミを捕まえてくれる大事な存在です。タヌキが工房の床の下で

子育てをしたのも、ここならではのエピソードです。臆病と聞いているタヌキですが、幼いタヌキはかまわず人に寄ってきました。



タヌキの子ども (体長約 20cm)

蚊やスズメバチをはじめ、虫たちとうまく折り合いをつけなければならぬ気がかりもありますが、ここに住まなければ知らなかった様々な生物の営みは、自然を愛し自然をどう生かすか考える大事な材料になります。

自身の木工制作では、動く仕掛けがあったり、音が出るものを多く作っています。作者の独自性ということは、美術の道に進んだ時から今でも変わらない課題ですが、その意味で最近大事にしているのは、自分の身近にある物です。材料として自宅敷地内の木を

多く使い、作品のテーマもここで目にする動物や自分の経験する生活の出来事などを取り入れるようになりました。



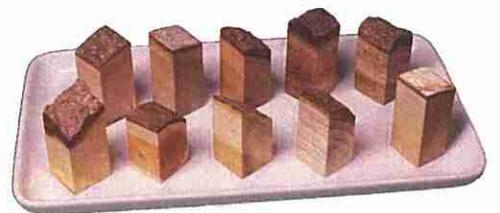
「きつぎコール」
2022年

「雪かきマン」は、雪国に暮らす人共通の苦勞を受け止めつつ、少しでも前向きに行きたいなという気持ちで考えました。

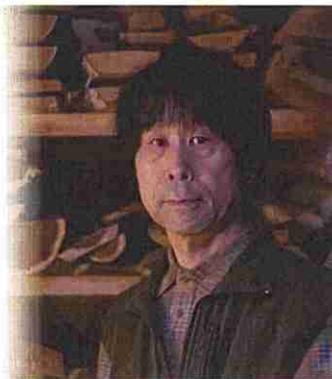


「雪かきマン」
2021年

時々木工講習会の講師もしています。今年おこなった「小別沢を知ろう」という町内イベントでは、小別沢で採れた木の樹皮付きマグネットを作りました。参加者の皆さんが木の種類の違いや、変わった木目の所に興味を持ってくれてとても楽しかったです。



2022小別沢里山体験講習会
「小別沢の木10種の樹皮マグネット」



■清水郁太郎(木工作家)
しみず いくたろう

- 1962 東京都生まれ
- 1984 道教育大札幌特美卒
- 1985 工房遊木民開設
- 2003 TVチャンネル優勝
- 2019 飛生芸術祭に出品

きつぎコール

作品動画
YOUTUBE

雪かきマン

小別沢新聞

3月

2023年(令和5年)

第16号

(最終号)

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：株式会社ダズリング
(TEL 615-7000)

小別茶話会の報告

第10回 2023年1月17日開催

冬の寒さも本格的な1月17日(火)、小別茶話会が参加者10名(町内会員(特別会員含む)9名、地域外1名)により行われました。

始めに、森林整備に携わるoutwoodsの足立さんより今年度の取り組みや、来年度の予定について説明がありました。

森林作業道と、入口にゲートを整備し、現在は施設して関係者以外は入れない状況になっています。

今年度は約720メートルの

大雨等への備え、作業日程や作業音、作業車の通行、隣接する畑との境界等、作業して分かった問題もあり、近隣の方々への説明をより丁寧に行っていきたいとの意向が示されました。今後、森林整備が進むと、近くを通る自然歩道の利用者との調整も出てくると考えられます。



その他の活動として、7月には小別沢の森から出た枝葉を円山動物園のゾウに与え、ゾウ

の糞から作った堆肥を畑に戻すという「森とどうぶつえん」や、「森と街のがっこう」による間伐体験、10月にはさとやまマルシェでの木こり体験や焚き火などを実施し、森に親しんでもらいました。

来年度は、約1400mの森林作業道を整備し、8〜9月頃に間伐を行う予定で、景観を守るように作業を進めていくとのことです。

意見交換では、森林整備を行っている辺りは昔鉱山で、金などを採掘していた、それらを運搬する通路沿いに神社があり、その横に坑道があったという話がありました。これまで炭焼きの跡だと思っていたものが鉱山の名残かもしれないというのです。「それならこんな取組をしたらおもしろいのでは?」「坑道が残っているなら、作業は気をつけな」と、新しい視点が加わりました。地域の歴史が今後の



取組にどのようなつながっていくのか楽しみです。

このほか、茶話会に代わる話し合いの場は今後も継続することが必要で、地域の人だけでなく、外から地域づくりに関わるプレイヤーや学生などを加えていきたい、自分たちの活動を後で振り返ることができるように会議を公開・記録してはどうかなどの意見が出ました。

最後に市から、小別茶話会と小別沢新聞を終了し、令和5年度からは地域(市民)が主体となった取組を市が補助制度や情報提供等によって支援する体制へ移行していくことについて話があり、取組のイメージを共有しました。(下段参照)

令和5年度の取組イメージ

	春	夏	秋	冬
市(補助制度)	中間支援団体の公募		中間支援団体の支援(補助金等)	
中間支援団体			地域主体の取組のサポート(継続→)	
森林整備 森林経営管理法	森林作業道		間伐	

※地域主体の取組へ移行するため、市が主催する小別茶話会及び小別沢新聞は終了します。令和5年度以降は補助制度や情報提供等によって地域の活動をサポートしていきます。

小別沢のあのヒト このヒト

農家 谷口 秀昭さん

今回は、主に小松菜を栽培している農家、谷口秀昭さんをご紹介します。

小別沢から出たかった 幼少期

小別沢の農家に生まれた谷口さん。まだ福井野小学校は無かった時代で、中央区の盤溪小学校に歩いて通っていたそうです。全校生徒でも13名くらいという小さな学校でしたが、5年生からはマイクロバスで手稲東小学校に通うこと



谷口秀昭さん。現在は小別沢の農家で小松菜を栽培している。

になりました。クラスだけでも60名近くいる大きな学校です。環境の変化に戸惑いながらも、小別沢以外の友達ができ、外の世界を知ったことでそれまでの価値観が変わってしまい、小別沢から出たいという思いが芽生えたそうです。

農家への転身

車や機械が好きだったこともあり、北海道工業高校（現在の北海道科学大学高校）への進学を決め、2年生から琴似で一人暮らしをすることにしました。この時から本格的に小別沢の外で生活するようになります。

高校卒業後は、アルバイトをしていたパン屋さんに就職し、数年働いて

した。

その後、高校で取った整備士の資格を活かし、ガソリンスタンドで働いていましたが、10年ほど経った頃、小別沢に戻ることになりました。「楽な仕事はない。だったら農家がいいかなと思った」当時の気持ちそう振り返ります。「農家を継ぐ」という確固たる思いがあったわけではなく、親の手伝いをする程度感覚だったそうです。

盤溪の農地と野生動物

谷口家の農地は、おじいさんの代からです。空襲から逃れるために家族で小別沢に移り、食べものを確保するために農業を始めたのだそうです。当時は盤溪で水田、小別沢で畑作、と2か所の農地で栽培していたということです。

「辞めてから30年以上経つけど、パンやケーキはまだ作れると思うよ(笑)」と意外な一面を見せていただく場面もありました。今ほどクマやシカの姿を見る事は少なかったそうです。「昔

は森に人が入り、森で薪や炭焼きをやっていた。それがバッファゾーンとなり、野生動物が畑において来づらかったのでは」と谷口さんは言います。今回の森林整備についても、そうした昔の環境が戻ってくることを期待しているそうです。

小別沢の魅力について

「ずっと住んでいるとそれが当たり前で何がよいのかわからなくなってくるが、永田さんや清水さんなど、新しく外から入ってきた人たちに刺激を受け、小別沢がよいところだと思えるようになった」と語る谷口さん。

今回、里山事業に関わるようになり、小別沢がどう変わっていくのか記録を残したいという思いが湧き、ドローンを操縦して小別沢を撮影するようにもなりました。谷口さんは、小別茶話会に意欲的に参加されてきた一人です。「次の世代が戻ってこられる場所として、小別沢のことを地域のみんなと一緒に考えていきたいんだ」最後にそう話してくださいました。

4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

令和4年度の 里山事業	小別沢新聞	第12号	第13号	第14号	第15号	第16号 最終回 (この号)
	小別茶話会	第7回 7月12日(火)	第8回 9月20日(火)	第9回 11月15日(火)	第10回 1月17日(火) 最終回	
	森林整備 森林経営管理法	森林作業道 づくり	森づくりの 説明会	冬山ウォーク		